

銃 砲 史 研 究

第 260 号

洋式砲術書にみる熟語の成立
(後)

所

莊

吉

平成6年6月

銃 砲 史 学 会 編

洋式砲術書にみる熟語の成立（後）

所 莊吉

三、オランダ通詞による西洋砲術書翻訳の限界

前号に紹介した『砲術備要』及び『ボスシキートレイコンスト国字解』は、幕命による最初の西洋砲術書であるばかりか、本格的なヨーロッパ軍事技術導入のあらわれであったといえる。しかるに本木正栄と石橋助左衛門がともにオランダ通詞として同役の立場にありながら、彼らの訳書を見る限りにおいては、昵懇の間柄にあったとは思われない。もし、両者が親密な交流をもって相互に補完し合えたとしたならば、少なくとも西洋砲術書に関する限りにおいて、より適切な翻訳語が生まれていたと想像できよう。

本木正栄や石橋助左衛門による訳業から三十年ほど後であるが、やはりオランダ通詞を家職としていた名村貞五郎元義（生没年未詳）の手によって、以撰・比喇阿児（P. J. B. A. J. C.）が一八二八年に著した原書（未発見）が翻訳されており、『蘭法戦船火礮秘抄』十二巻本として知られている。この訳書の翻訳年代については確実な記録がないものの、天保十年（一八三〇）頃に訳したものと有馬成甫博士は推定されている。しかし、このでの用語がまだ熟していないことを見ると、博士の推定年代より遡るものと考えてもよいだろう。なおこの訳書は、「精雅堂藏板」とある野紙に清書されていることから、出版を試みた版下本の形跡も窺えるが、その後、安政四年（一八五七）に再編集した三巻本『遠西軍艦砲要』と題する写本しか伝えられていないので、天保年間に板行はされなかったようだ。

さて、この『蘭法戦船火礮秘抄』からみた用語として次のものが挙げられるが、訳語としてはまだ生硬さから脱していないと同時に、本木や石橋の訳書をほとんど参考にしていなかったことが察せられる点に興味もたれる。

アグトルターリス〔跡綱〕、アス〔樞〕、アラ、ム〔打方〕、アルメン〔腕〕、アーンセツテル〔玉竿〕、
イン〔内ニ〕、ウイス〔拭ヒ〕、ウイスセル〔箒拭器〕、ウイーレン〔車〕、ヲイト〔出セ〕、ヲフィ
セコマンデル〔下知人ノスケ役〕、ヲフシールコンスタール〔石火矢打役人〕、カームルバント〔室
帯〕、カラ！ウエン〔カスガヒ〕、カリーブルス〔大砲〕、カルデウース〔袋葉〕、カルロンナーデス
〔短大砲〕、クーフート〔金手子〕、ゲシキユットランターレンス〔行燈〕、ゲスウインデラーディン
グ〔早込〕、コーゲル〔玉〕、コップ〔頭ノ義〕、コップトフ〔頭綱〕、コロイトホールン〔口葉入〕、
コロイトレープル〔葉サジ〕、コロス〔臺〕、コンスタール〔石火矢打役〕、コンスタールマヨ
ル〔石火矢頭人〕、サーイエシエン〔毛織モノ〕、シカルニール〔臍〕、シキトウアクテン〔不寝番人〕、
シケープスコック〔料理人〕、シュントガット〔火門〕、シーラツパンデン〔飾リ帯〔飾リ帯ノ義〕〕、
シール〔魂ノ義〕、スコロートボス〔箱〕、ステュツケン〔砲〕、ストツプ〔詰ヨ〕、ストルプ〔綱〕、
スパーンセターリー〔跡綱〕、セイスチユツケン〔両脇板〕、セイターリス〔脇綱〕、セツトアーン〔サ
シ入ヨ〕、ソール〔底〕、ドロイフボル〔葡萄玉〕、バタイレ〔惣備筒〕、ハンドスパーク〔木手子〕、
ヒュール〔火〕、フィシールフック〔規角〕、フィシーレイン〔規〕、プラットロート〔板鉛〕、ポイ
ンテールン〔規〕、ボール〔セセリ〕、ボルストトウ〔胴綱〕、ボルストン〔胸ノ義〕、ボールデン〔船
縁〕、モンディング〔口〕、ランゲスチユツケン〔長大砲〕、リングボウト〔輪頭釘〕、レイフ〔躰〕、
レープル〔葉匙〕、ロイムナードル〔セセリ〕、ロツフェル〔太鼓打〕、コルパールド〔臺〕、ロント
〔火繩〕

また意訳または造語に至らなかつたものをみると、ほとんどが直訳に近く、これでは砲術の予備的知識をも
たなければ理解が困難であつたらう。

ウインドプロッペン〔風ノ栓〕、ウインドプロッペン〔筒口ノ木栓〕、エレファチー〔勾配ノ義〕、カラッセル〔コサギ道具・コサゲ物〕、ケールブルレーキング〔返リ綱〕、コウス〔鑄付アル輪〕、コロス〔厚キ底板〕、ストイトカラペン〔跡ニシザラサル様ニハムル道具〕、スペールロイムテ〔遊ヒノ空虚〕、スロットステュウンスル〔引金ヲ付ル処〕、スワルチェル〔黒キ繪具〕、バックル〔パンヲ焼者〕、ハットレイスポールト〔明リ窓〕、ハルケメント〔野牛又ハ羊ノ皮〕、ハルスバンド〔首ノ帶〕、ヒイシールスコット〔玉ノ行詰リ〕、ファルポールト〔砲窓ノ落シ戸〕、フィシールスコット〔規打ノ義〕、フィシールレイン〔規筋ノ義〕、フルステルキングスパンデン〔強メ帶〔強メル帶ノ義〕〕、フルピンティングボウト〔クサル釘ノ義〕、プロップ〔玉ゼキノ丸木短〔玉ゼキノ丸キ短木〕〕、ペウルトカステン〔替々勤ル役人〕、リコセッテン〔玉ノトベリ〕、ロイムナードル〔セセル錐〕

次いで、この『蘭法船戦火礮秘抄』の翻訳から程遠くない天保十二年（一八四一）に、やはり名村元義が訳した雅骨夫微尔木（J. W. Sesselter）の「Handboek ter Vervarding van Ernst-Vuurwerken, Delft, 1823」十二巻があり、これは『遠西火攻精選』または『遠西火工其精大全』として知られている。この年は、高島秋帆が武州徳丸原において西洋兵学の演練を公開したことにより、一躍洋式砲術への関心が高まったという時代の背景があつて、翻訳の巧拙は別として注目を浴びたようである。なお、この訳書は安政七年（一八六〇）に上総の浅野敬徳が抄訳したものを『遠西火攻精撰撮要』の表題で出版しているので、これの訳語を《》内に参考として掲げ、『遠西火攻精選』の訳語とともに紹介する。

アススコップ〔灰カキ〕、アルティレリイ〔石火矢〕、インファンテリー〔士卒〕、インファンテリーパトローン〔歩卒火薬囊紙〕、ウレイフホウト〔播木〕、ウレープターフル〔播盤〕、エイゼレンフュイセル〔鉄臼〕、エルセン〔柳〕、オンゲル〔凝固脂肪〕、ガス〔瓦斯〕、ガース〔絵絹〕、カノーン

〔石火矢〕、カメルルガールレン〔駱駝糸〕、ガラウガールレンス〔灰色糸〕、ガラウリッネン〔灰色木綿〕、ガラナイトボイセン〔木管〕、カラベイン〔馬上筒〕、カランス〔箍繩臺〕、カリイフル〔砲口〕、カリイフル〔炮筒〕、カルンナデス〔短大炮〕、カロンナーデルス〔短臺炮〕〔短火炮〕、カン〔器〕、キートル〔如露罐〕、ギートルレーブル〔鑄七〕、クレイロースール〔鉄網〕、ゲウヲネロンド〔尋常火線〕、ゲズウインドペイピス〔迅速火管〕、ゲズウイントロンド〔導火〕、ゲズウイントロント〔葉線〕、ゲズボンネンカタヤーイン〔草綿糸カセ〕、ケテレンピスコロイトサック〔合和袋〕、ケートル〔鍋〕、ゲブレパレールサーグメール〔調製鋸木屑〕、ケムールスガールレン〔駱駝糸〕、コクト〔三脚子〕、コーゲル〔玉・丸・銃丸〕〔彈〕、コーゲルケネープタインタ〔丸鋏〕、コーゲルステラントハールレントン〔磨丸桶〕、コーゲルフォルム〔玉鑄型〕、コーゲルマンデン〔丸籠〕、ゴム〔指〕、コールシュール〔炭酸〕、コールン〔五穀酒〕、サアイ〔毛織〕〔毛布〕、サーク〔鋸〕、サススコツフル〔木篋〕、サスレーブル〔火薬七〕、サツケバント〔袋帯〕、サルペートルシュールロード〔硝石酸鉛〕、シエントヒュール〔導火〕、シュトルストフ〔酸素〕、シュンドルス〔導火薬〕、シリンドル〔筒形〕、スウイムブラッセン〔浮袋〕、スコイムスハンナー〔網杓子〕、スズッキストナ〔窒素〕、スタムプル〔棒〕〔杵〕、ステシイケル〔播モノ〕、ステーフスル〔糊〕、ステーンマンデン〔石籠〕、ストルムサック〔怒浪袋〕、スハンセセーブレ〔石鹼〕、スメールトケイトル〔溶解鍋〕、セインヒュールン〔合窓火〕、セーフトケイトル〔漉鍋〕、セリントルフォルミグ〔棒・杵〕、タス〔胴乱〕、ダライパンク〔轆轤〕、ダンブコーゲル〔濛気丸・烟玉〕〔濛気彈〕、テイイプステムプル〔鑿〕、テッケン〔押込棚〕、テレグトル〔漏斗〕、デンネボーム〔杉〕、トツフェルサーグ〔細工手鋸〕、ドーフポット〔火消壺〕、ドロイフェコーゲル〔葡萄丸〕、パツプ〔糊劑〕、ハスプル〔攪〕、ハッタメス〔斧〕、

パトローン〔胴葉《火薬包》〕、パトローンサック〔火薬袋〕、パトローンパツピール〔火薬袋紙〕、ハ
ラルレル〔平行線〕、ハルスト〔脂〕、ハルプ〔千石篩〕、ハルプ〔銅篩〕、パーレンケレート〔馬毛
氈・馬尾織氈〕、バントエイスル〔鉄帶〕、ピストーレン〔短炮《掌銃》〕、ヒュスコロイト〔火薬〕、
ヒュスコロイトサス〔細末火薬〕、ヒュルス〔紙筒〕、ヒュールタンク〔火箸〕、ヒュールペイル〔火
矢〕、ビンドカーレン〔紮糸〕、フィスレイム〔魚膠〕、フアルムスハプロック〔型臺〕、ブランドコ
ーゲル〔焼丸《猛燃彈》〕、ブリッキドース〔罐《鉄盒彈》〕、ブリュススタンゲン〔火繩〕、プルー
プモルチーイル〔試火薬炮〕、プルーフローク〔試験灰汁〕、フルール〔敷板〕、プルールスパトン〔攪
筥〕、フリースレイム〔肉膠〕、プロイムアロイン〔フクゲ明礬〕、フロック〔打盤〕、ブローテン〔朴
硝石〕、ペイピース〔管〕、ペイピーススラーゲル〔槌〕、ペイピースフアルム〔作管型《迅火管臺》〕、
ヘイル〔斧〕、ペインボーム〔杉〕、ヘーストル〔間木〕、ベッキ〔瀝青〕、ヘット〔脂肪〕、ヘルス
ポンプ〔竜吐水〕、ヘンニツプ〔麻〕、ヘンネンカクト〔驚翅管〕、ボイス〔木管〕、ボイセン〔管《信
火管》〕、ボイセンスタンブル〔管棒《信火管填菓杵》〕、ボイセンテレッケル〔管抜き〕、ホウテン
ハームル〔槌〕、ホクトメートル〔驗液器〕、ホットアース〔木塩〕、ホムフレイラホラトリュム〔避
火器製造所〕、ボルトパツピール〔厚紙〕、ボーレン〔錐〕、マストボーム〔帆柱樹〕、マート〔量器〕、
ムートルローク〔母灰汁〕、メターレンフェイセル〔唐金臼〕、メールヒュルフル〔極末合成火薬〕、
モウト〔麦酒〕、ヤグーココロイ〔獵火薬〕、ラスプ〔鮫皮〕、ラット〔板〕、ラードスコツフル〔火
薬籠〕、ラボレール〔火薬局〕、ランタールン〔火燈〕、リウネン〔定規〕、リウンスパーン〔手規木〕、
リグトコーゲル〔光り丸・照明丸《燭彈》〕、リュッセンツトフ〔紐〕、リング〔丸頭環〕、リンデン〔榲
レイン〔繩〕、レソレメント〔試験表〕、ロイケンボーム〔落葉松〕、ローク〔灰汁〕、ローデンコー

ゲル〔鉛丸《鉛彈》〕、ロートカルク〔鉛石灰〕、ロートキステイー〔鉛丸箱〕、ロートソイクル〔鉛糖〕、ロルトルス〔真木〕、ロルフランゲ〔細工盤〕、ロント〔線〕

ハルストおよびゴムに《脂》《指》の新字を造っているが、これは松脂およびゴムラテックスのことで、元義は先輩の製字を用いたと言っているがその典故は不明である。また適当な用語が見当たらないため、直訳又は意識にとどめた箇所はかなりの数にのぼる。元義による新造語のうち熟語として幕末まで用いられたものが十指に満たないというのは、創造力の乏しさというより、意識で事が足りていた通常の翻訳業務と違って専門知識を要する技術書を対象にした難しさによるのであろう。そのことは次に掲げる直訳文をみればある程度の察しが付けられる。

アラルムスタング〔「アラルム」ハ軍兵ヲ集ルノ義「スタング」ハ竿ノ義〕、アルテレイイコロイト〔石火矢ノ火葉〕、オーフルデウツク〔覆木綿ノ義〕、ヨンドルオフヒシル〔頭役ノ次ノ人〕、オンベスラーゲネ〔釘鉸ヲ用ヒサル義〕、ウイローク〔一名ハ「ゴムティユス」大抵堅実ニシテ黄色ナル者ナリ是物燃ヘ易シテ且ツ燃力ノ強キ者ナリ〕、ウエルキターフル〔細工スル盤〕、ウアルプケンキュット〔砲ノ総名〕、ウリュグトウ〔締メ型ヲ付ル火矢用ルノ綱ノ義〕、ウレイフターフル〔物ヲ挿ル臺〕、ウレイフホウト〔臺ノ上ニテ火葉ヲ摺ル木〕、エンゲリスフロイン〔青キ画料ノ名〕、オリファンツファルマート〔象紙ノ義〕、カーセマッテン〔土ヲ以テ圓形ニ厚ク塗リタル土室〕、カッゲル〔火ヲ焚キ居室ヲ暖ムル器〕、カラツフルス〔刮ゲル器《剔滓子》〕、カラベイン〔馬乗ノ持筒《肩銃》〕、ギートレールブル〔鉛ヲ型ニ流ス匙〕、グルーイローストル〔焼ク金網ノ義〕、ゲウエーレン〔兵卒ノ筒《手銃》〕、ケートルス〔上口ノ鍋形ノ如クナル処〕、ゲレイティングスヒニルセン〔導火ノ筒〕、ケーレン〔歸ル義〕、コーゲルケネーフタング〔丸ノ鑄口ヲ切ル鋏〕、コーニングススタントル〔三ノ如ク立ノ義〕、

コーポラール〔「オフヒシール」ノ代ヲ勤ムル役〕、コロア〔粗キ義〕、サス〔可燃体ヲ以テ製セシ者
〔硝石・硫黄・木炭ノ三品ヲ摺合シタルモノ〕《火葉》〕、サスコツフルチー〔火葉ヲヨセル器械〕、
サスバツク〔細キ圓狀「サス」入ル器〕、サスバツケン〔「サス」ヲ入ル、箱〕、サツクバント〔袋ノ
紐ノ義〕、サルペートルブレーケン〔硝石ヲ碎ク義〕、シカラীগ〔四ツ足ノ付タル臺〕、シケーフ〔筒
キ一遍平ナル石〕、シユンドルスタンブル〔「シユンドル」ヲ込ム棒〕、シリन्दイリツセケツプ〔筒
狀ノ切り欠キ〕、スコイムスパーン〔泡沫ヲ抄ルカシ杓子〕、スコイムレープル〔泡ヲ抄フ匙〕、スコ
ロートボスセン〔古釘其外色々ノ者ヲ「ブリッキ」ニテ拵ヘタル器ニ入レ玉トスルモノ〕、スタンフル
〔針穴ノアル棒〕、ストークゲレートスカツペン〔火ヲ焼クニ用ル具、直ニ煮ル器、火筋〔ひばし〕・
火斗〔ひかき〕・火消壺・火吹筒〔ひふきだけ〕・大包丁・鋸・斧ノ類等平常竈邊ニ備フル者ナリ〕、
スハンサーグ〔弦掛ケ鋸〕、スピツロルドル〔先ノ尖リタル真木〕、スペールウエルキ〔火矢ノ頭ニ付
ル物ノ義〕、セリントルフヨルミグ〔筒狀ノ義〕、タツプ〔切り欠キ〕、タトウク〔火葉ヲ煮ル場所〕、
タラーゲサス〔柔緩ナル「サス」〕、ヂスラークネグトコーゲル〔絞釘付ノ光リ丸ノ義〕、チツテスル
フ〔湿タル者ノ義〕、ディユツブルハーケン〔「スナツパーン」ノ類小ナル筒ノ一種《大手銃》〕、デ
レーフサス〔流出ル「サス」〕、ドローラストフ〔乾キタル者ノ義〕、トロンムル〔篩ノ上下ヲ覆フモ
ノ〕、ドントカランス〔未ダ火繩ニセザル綱〕、ナエイネ〔小ナル義〕、パトロローネン〔火葉ヲ入ル、
袋《火葉包》〕、パトロコンキスチー〔「パトロ」ヲ入ル、箱〕、パーレンケレート〔馬尾織ノ敷物〕、
ハアーレンセーフ〔太鼓ノ形ヲ具タル馬尾ノ篩〕、パンクスクルーフ〔螺旋ヲ装置シタル臺〕、ハンド
ペイル〔柄アル包丁〕、ハンドリグトコーゲルス〔手ニテ擲ツ光リ丸ノ義《手投燭彈》〕、ヒュスコロ
イトスコツプ〔銅ニテ製シタル器火葉ヲ抄フニ用ユ〕、ヒュスコロイトバツク〔粒ノ火葉ヲ入ル器〕、

ヒュールウエルケルスワーゲン〔火具ヲ運送スル車ノ意〕、ヒュールペールヒュルセン〔火矢ノ筒ノ義〕、ヒュールペイルフト〔火矢ヲ製スル臺〕、ビントガールン〔タ、リ付ル糸〕、ビントホウト〔糸ヲシメル具〕、フックインステニルメント〔四半圓ニシテ度ヲ付ケ度数ヲ測ル器〕、フュインコロイト〔細粒ノ火薬〕、フラグトマーテン〔液汁ヲ入テ量ル器〕、ブランドエイズル〔焼鉄ノ義〔腔鉄燃弾〕〕、ブランドコーゲルベンネン〔小サキ棒〕、ブランドサス〔焼ル「サス」《燃弾火薬》〕、フリユグケサス〔揮発ナル「サス」〕、フルカップ〔頭ヲ付ル事〕、ブルーク〔紙ヲ裁ニ用フル包丁ヲ装置シタル器〕、プルーフモルチール〔火薬試ノ砲〕、フルールリッパ〔ネダ板ヲ付ル木〕、ブレットモーレン〔押ツプス車〕、プロック〔此ノ袋ヲ載セテ打ツ盤〕、ヘグチー〔台ノ内ニ針ヲ止ル処〕、ベスラーゲネスヒールス〔釘鉸ヲ用フル者〕、ペーブル〔真木ニマキタル紙ヲシメル器ノ名〕、ベルカメント〔獸ノ薄皮〕、ボイセンスタムブル〔火薬ヲ込ム棒《信薬填杵》〕、ボイセンブロック〔管ニ火薬ヲ込ニ用ル盤〕、ホウテンモルレン〔火薬ヲ一味ツ、ル、器〕、ボムメンハーク〔輪「ボム」ヲ取り扱フニ用ル者〕、マストウヨルプ〔柱ノ如キ形ヲ云歟〕、マルレン〔型ヲ通シ試ル〕、ミュニティン〔軍用諸器ノ名〕、ラアッテン〔名ク切タル板ナリ〕、ラボレールベッケン〔火薬局ニ用フル処ノ鍋〕、ラーム〔糸ヲ張ル器械〕、ルールスパイン〔攪和スル器〕、レイデレンヒュスコロイトサツク〔皮ニテ製ス火薬ヲ碎末スル袋〕、レープ〔革切レノ義〕

また意訳文もなく原語のまま用いられている例として、ガラナート、コロップ、スピーケルス、スブリッツホーリーン〔器名〕、フラムポウウエン、ブリッキドーセン、ブリッキヒュール、フルキット、ペイルラッテン〔何ノ用ニナルヤ原本ニ不言〕、ポビュリーレンなどがある。少なくとも砲術に関する限り、元義にはカノン、ホウキツツル、モルチール、ゲヴェールなど砲種を区別できるだけの知識があったとは思えない。

例えば、第七巻のヒュールペイルについて、「此ヒュールペイルノ一篇ニテハ製作等詳ニ知レ難シ、雖然此一篇ヲ闕事不能故ニ已ム事ヲ得スシテ此ニ挙グ、其詳説ノ如キハ他ノ全書ヲ得テ此ニ述ヘシ、実ニ是一篇ハ譯稿トモ言ヘシ諸君子之ヲ恕シ玉ヘ伏而請。元義敬白」とあるように、この部分は特に難しかったようである。

本木正栄と名村元義による訳語を比べると、翻訳年代の早い『砲術備要』のほうが次の例のように訳語として熟しているといえるのは、語学力のある大槻玄沢や幕府鉄砲方の井上左太夫の協力があつたことを前に述べたが、元義の直訳ともいえる訳文からは、正栄のように強力な助言者がいなかったものと察せられる。このことから名村が砲術書の訳語を命じられたのは、彼の翻訳力が優れていたというより、たまたま石橋・本木に続いて通詞の輪番に当たっていたという単純な理由に基づくものであつたと考えられる。

特別な翻訳については、家職としての面子があつて同役の通詞に協力を仰ぐなど考えられなかつたとみられ、つぎにあげる訳語の①は『砲術備要』、②は『蘭法船戦火礮秘抄』、③は『遠西火攻精選』を表す。

ウキッセル〔①銃箒、②箒拭器〕

カノン〔①大砲、③石火矢〕

カラッセル〔①雙牙鉤、②コソギ道具、③刮ゲル器〕

コーゲル〔①弾丸、②玉、③丸〕

コロイドマート〔①葉升、③量器〕

コロイトレープル〔①葉匙、②葉サジ〕

スパーク〔①木槌、②木手子〕

モント〔①銃口、②口〕

類語が少ないため例とするのは適切でないかも知れないが、同役の通詞でありながら、訳語に共通するところ

ろがないのは、通詞の間にもそれぞれ家職として翻訳の流儀があったと考えざるを得ない。つまり『ボスンキ
i テレイコンスト国字解』は石橋流のオランダ語翻訳術、『砲術備要』は本不流オランダ語翻訳術、また『遠
西火攻精選』は名村流とするのは、一見乱暴な見方かもしれないが、そうでもなければ、同時代に長崎に居住
してオランダ語の翻訳に際しては職分として共同任務に就いていたのに、単独の翻訳では共通する訳語がほと
んど見られないことの説明がつかない。

『高島流砲術秘書』が悪文といわれるのも、兵学の専門家による翻訳ではなく通詞に頼ったためで、フォー
ムが定まっている貿易用語を家業として継いできた伝統的職業翻訳職人の限界を示している。しかし、阿片戦
争以後の国際情勢は、日本の防衛問題を専門知識がないとかオランダ人に聞かなければ分からないと弁解を重
ねるオランダ通詞に任せざるわけにはいかなくなっていった。それと時を同じくしてオランダ語を習得した医学者
たちの好奇心の対象が時代の要請と共に広がりをもみせ、天保年間を境にして世襲的権益の擁護に汲々とするオ
ランダ通詞に代わって医学者による兵学書の翻訳が始まり、やがて軍事技術者による本格的なヨーロッパ兵学
の紹介が行われるようになった。幕府もこの『遠西火攻精選』を最後として、オランダ兵学書の翻訳を通詞か
ら天文方の語学者たちにシフトする。

銃砲史研究

平成六年六月十一日

銃砲史学会

東京都渋谷区神南一ノ一

社団法人

日本ライフル射撃協会

頒価 五百円

編集発行

